

農林業における獣害防止に向けた捕獲技術の実証研究

令和5～7年度（国補：鳥獣被害防止総合対策交付金）

川島直通

三重県ではシカやイノシシといった大型哺乳類による農林業被害が長らく問題となっている。そのため、効率的な捕獲方法を明らかにし、各地で捕獲を推進していく必要がある。また、捕獲によって実際に生息密度がどの程度低減させることができるのか、もしくは低減した生息密度を維持するためにはどの程度の捕獲努力を続けていくべきかといったことを明らかにすることが、農林業被害の防止を進める上で重要であると考えられる。そこで本研究では、シカ等の農林業に被害を及ぼす獣の低コストで効果的な捕獲方法を検討するとともに、再造林地周辺においてシカの捕獲を実施し、シカ出現頻度減少効果の検証を行う。

1. 低コストで効果的な誘引餌の使用方法の検討

三重県内の山林において、食塩を用いた異なる供給方法によるシカの誘引効果を比較検証した。2025年7月から8月の41日間、3箇所の調査地で自動撮影カメラによるモニタリングを行った。各調査地において、塩土区（食塩を土と混合し、浅形容器に入れて地表レベルに埋設）、塩水区（バケツを地面に設置して供給）、および対照区の3区をそれぞれ設置した。その結果、来訪頻度は塩土区で対照区の3倍となった一方、塩水区では対照区と比べて来訪頻度の増加は認められなかった。また、訪問イベントあたりの撮影回数（滞在時間の代替指標）も、塩土区（1.96回）が対照区（1.25回）を上回る傾向を示した。塩土区には雌雄ともに来訪し、本調査の範囲では顕著な性別による選択性を示す証拠は得られなかった。これらの結果から、食塩を土壌と混合し地表レベルに埋設する方法は、短期的にシカの手来訪および滞在を促進する安価で効果的な誘引手法となり得ることが示唆された。

2. モデル地区におけるシカ出現頻度の経時変化と生息密度推定

大台町内の再造林地周辺の山林を調査地として、捕獲によりシカの出現頻度がどのように変化するかを検証した。調査地には令和6年4月から令和7年12月まで全域をカバーするように7台の自動撮影カメラを設置し、シカの出現状況を調査した。令和6年10月から令和7年12月までシカの捕獲を実施し、捕獲前後のシカ出現状況を比較した。なお、調査期間前には調査地周辺ではシカの捕獲は行われていなかった。

調査期間中、箱罠により5頭、くくり罠により6頭、銃器により2頭のシカが捕獲された。季節ごとのシカ撮影頻度を年度間で比較したところ、春-夏季（4-6月）、夏-秋季（7-9月）は捕獲実証開始前後で減少は確認されなかった一方、秋-冬季（10-12月）では若干の減少傾向が確認された。調査地においてシカによる被害リスクを減少させるためにはさらに捕獲を進める必要があると考えられた。